

2019年度入試直前動向③～私立大入試のトピックス～

河合塾

2018/12/17

今号では、2019年度入試における私立大の注目点を紹介する。私立大では来春も学部新設が多くみられるほか、入学定員超過抑制の動きが継続する。以下、詳細をお伝えする。

■学部新設の動きは活発

私立大では、国公立大とは対照的に学部新設の動きが目立つ。2019年度は国際系・医療系での新設が活発だ。【図表1】に国際系、医療系それぞれの主な新設・改組大を挙げた。

国際系では、中央大、立命館大といった難関大でも学部新設がある。中央大は国際経営、国際情報の2学部を新設する。河合塾の全統マーク模試では、いずれも回を重ねるごとに志望者が増加しており、認知度が上昇していることが窺える。また、立命館大はグローバル教養学部を新設する。ただし、特別入試による募集が中心で、一般入試はセンター併用方式での2名のみ募集となっている。

医療系では、理学療法・作業療法といった医療技術分野のほか、看護学部・学科の新設が目立つ。

このほか、青山学院大がコミュニティ人間科学部を新設する。中央大の2学部と同様に受験生の認知度が高く、すでに志望者が集まっている状況だ。

■入学定員超過抑制の動き

私立大では近年、都市部の大規模大を中心に入学定員超過抑制の動きが続いている。背景には、入学定員超過率が一定の基準を超えると補助金不交付となる、学部新設の際に入学定員超過率が一定基準内に収まっている必要があるといったルールがある。このため、各大学は入学定員充足率を低く抑える必要があり、合格者を絞らざるを得なかった。こうした動きにより、私立大入試は難化しており、厳しい状況が続いてきた。

では、2019年度入試についてはどうだろう。前述の入学定員超過抑制策は2019年度も継続するが、都市部の主な大規模大の入学定員充足率をみると、すでに定員超過を是正し終えているとみられる大学もある。また、2019年度の学部新設のために入学定員充足率を低く抑えた大学では、2019年度入試では前年ほど合格者を絞り込まないことが考えられる。大規模私立大で一斉に合格者を減らすといった極端な動きが起こるとは考えにくいだろう。

【図表1】私立大 主な学部新設・改組の動き

<国際系>

大学	学部	学科	入学定員
中央	国際経営	国際経営	300
	国際情報	国際情報	150
東京成徳	国際	国際	81
名古屋外国語	世界教養	世界教養	100
		国際日本	60
鈴鹿	国際地域	国際地域	120
京都産業	国際関係	国際関係	200
立命館	グローバル教養	グローバル教養	100
関西国際	国際コミュニケーション	英語コミュニケーション	50

<医療系>

大学	学部	学科	入学定員
北海道医療	医療技術	臨床検査	60
医療創生	健康医療科学	理学療法	60
		作業療法	40
明海	保健医療	口腔保健	70
順天堂	保健医療	理学療法	120
		診療放射線	120
清泉女学院	看護	看護	76
長野保健医療	看護	看護	80
岐阜協立	看護	看護	80
名古屋女子	健康科学	看護	80
		健康栄養	160
藤田医科	保健衛生	看護	135
		リハビリテーション	
		理学療法専攻 作業療法専攻	70 45
四天王寺	看護	看護	80
大手前	国際看護	看護	80
川崎医療福祉	保健看護	保健看護	120
		リハビリテーション	
	理学療法	理学療法	60
		作業療法	60
言語聴覚療法	60		
視能療法	40		

※河合塾調べ

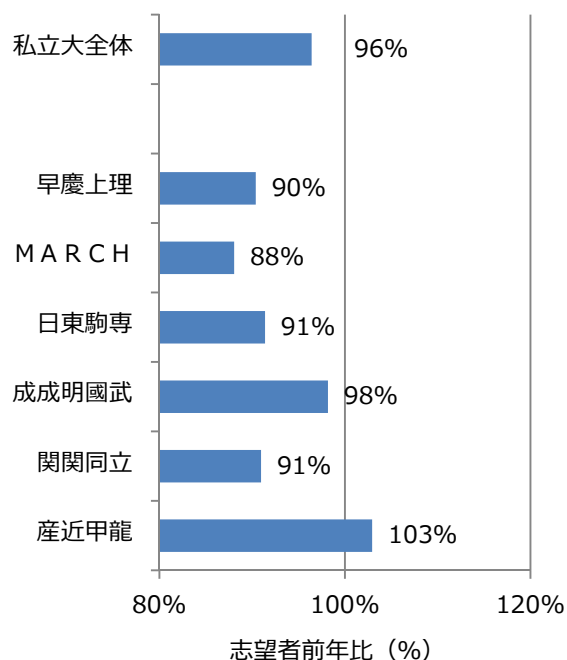
■大学グループ別の志望動向—難関大で志望者減少

私立大の志望動向について、第3回全統マーク模試の状況をもとに見てみよう。【図表2】は主な大学グループ別の志望者前年比をグラフにしたものである。私立大全体の志望者は前年比 96%と減少している。そのうち、早慶上理、MARCH、関関同立といった難関大では減少率が高く、それぞれ志望者が前年比で1割ほど減少している。

早稲田大は、志望者は前年比 87%となっている。とくに、政治経済、社会科学部といった最難関の学部で志望者の減少率が高くなっている。慶應義塾大は、志望者は前年比 93%となっている。商、総合政策、医、薬、看護医療学部などで減少率が高くなっている。また、東京理科大では志望者前年比は 100%と前年並みであるものの、上智大では同 85%と減少しているほか、MARCH、関関同立では軒並み志望者が減少している。前述の入学定員超過抑制の動きに伴う私立大入試の難化の影響から、受験生が難関大を敬遠している様子が見える。

一方、志望者の増加が目立つ大学もある。なかでも、大東文化大(志望者前年比 123%)、拓殖大(同 114%)、東京電機大(同 114%)、明星大(同 117%)、立正大(同 111%)、関東学院(同 126%)、追手門学院大(同 142%)、大阪工業大(同 122%)、大阪産業大(同 131%)、摂南大(同 120%)、桃山学院大(同 137%)、神戸学院大(同 125%)といった大学で高い増加率となっている。2019年度入試は、受験生の安全志向の影響から、都市部の中堅私立大において難化が懸念される。

【図表2】主な大学グループ別志望動向



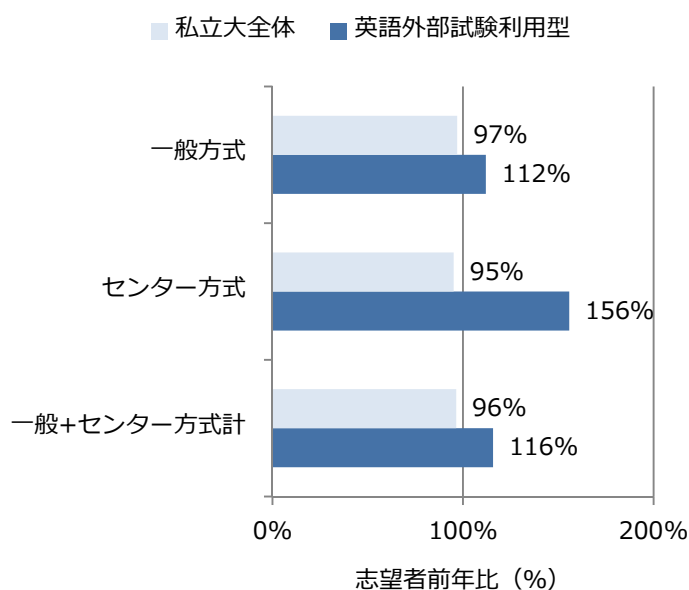
※第3回全統マーク模試より、一般+センター方式で集計

■一般入試での英語外部試験利用の拡大—活用する受験生が増加

私立大では難関大を中心に志望者が減少傾向にあるなか、英語外部試験を利用する入試方式の志望者は増加している。【図表3】は英語外部試験利用型の入試方式と、私立大全体の志望者前年比を比較したグラフである。いずれの集計でも、英語外部試験利用型入試の志望者は大きく増加していることがわかる。

2021年度入試より大学入試センター試験に代わって導入される大学入学共通テストでは民間の英語資格・検定試験を利用するとされているが、個別の大学入試ではすでに一般入試に利用する動きが拡大している。2・3年前までは英語外部試験のスコアを持つ限られた受験生が、こうした入試方式を利用するケースが目立った。しかし、受験機会を広げるために英語外部試験の準備をする受験生が増えていることが窺え、英語外部試験利用型入試は英語が得意な受験生が利用するというイメージは崩れつつある。

【図表3】私立大 英語外部試験利用型入試の動向



※第3回全統マーク模試より

以上、全3回に亘り2019年度入試トピックスを紹介した。河合塾では入試情報サイト Kei-Net で、1月にセンター試験速報、2月に国公立大・主要私立大志願者速報をご提供する予定だ。最新の動向はそちらで確認してほしい。